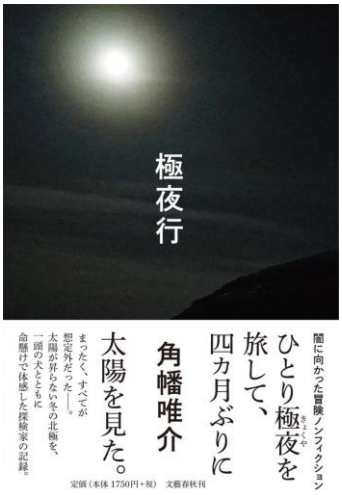
角幡唯介著 「極夜行」「新・冒険論」



著者は探検家。早稲田の探検部で活動し、埼玉の朝日新聞記者の経歴を持ちます。
彼の「空白の五マイル」を以前に読みましたが、この探検紀「極夜行」も私を極限状態に連れて行きました。

この探検を行うため彼は三度の準備探検を行い本番に臨みます。この 4 年間の蓄積がこの極夜行を無事に成し遂げた原因だと分析しています。

2012 年 12 月～2013 年 1 月　カナダで実験的な極夜放浪。北緯 69 度。

2014 年 1 月～4 月　グリーンランドで極地世界の放浪。北緯 79 度。

2015 年 3 月～10 月　グリーンランドでデポ設置。北緯 79 度。

2016 年 11 月 7 日～2017 年 2 月 10 日　約 80 日間の探検。北緯 79 度。（極夜行）

北極や南極には白夜があることは知っていますが、その逆の極夜もあるというのはイメージができませんでした。何ヶ月もの間全く太陽が昇らない地帯があります。太陽が昇らなくても月が昇るときは薄く地表を照らすこともあります。なので月の暦に合わせて月明かりを頼りに行動します。しかしほぼ真暗闇のなかを、ヘッドランプ一つでウヤミリックという名の犬を連れ、2 台のソリを引きます。1000m の氷河を登り、ツンドラを超え、白熊や狼のうろつく海氷の上をひたすら歩きます。激しいブリザードに遭う。マイナス 30℃～40℃もの極寒の地でテントに閉じ込められる日常は想像を絶します。

植村直巳さんもかつて通っていた世界最北の村、北緯 77 度 47 分のシオラパルクから出発し、北緯 79 度辺りまで行き、戻るという凄い計画です。約 80 日分の食糧や燃料はソリに積みきれないので、中間地点のアウンナットとイヌアフィシュアクという古い小屋に 3 ヶ月分をデポして置きます。「2015 年。デポを運ぶため 1000m の氷河を 2 度登り、3 度下った。アウンナットとイヌアフィシュアクに 3 回ずつ足を運ぶ。デポ食糧を作るためアッパリアスという水鳥を 700 羽ほど捕まえた。北極岩魚を刺し網で確保。3 頭の麝香牛を仕留め食糧にする。」しかしそのデポした食糧は白熊に徹底的に破壊され食べられてしまいます。食糧が足りない絶望的状況になった彼は犬を喰うところまで追い込まれてしまいます。若しここで犬を喰ったら、白熊が襲ってきたときの対応やソリを引く困難さを克服できないなどと考え、麝香牛を狩に行くことにし、計画を変更します。しかし闇は深く、牛を狩ることはできませんでした。

この牛一頭で数週間は命を繋げるのに更に窮地に追い込まれます。犬は痩せ、彼の糞をもガツガツと食べる。収穫なしで古い小屋に戻ります。あと数日分しか食糧が無くなりいよいよ犬を喰うまでに追い詰められたとき、小屋の片隅で白熊が見逃したドッグフードの残りを偶然発見します。彼は大喜びで犬に与え、生きる喜びに浸ります。極悪なブリザードに遭いながらも、帰りは狼や兎を狩るなどし、何とか食糧を確保しながらシオラパルクに戻り 4 ヶ月ぶりに太陽と再会したときの記述に色彩を感じました。

地図の上では今や空白地帯は無い。冒険する場所はもう地球上には無いのだろうかと彼は問いかけます。マニュアル化、大衆化されたエベレスト登山がある程度危険であっても冒険的ではない。文明への批評的性格をもつ「脱システム的行動」こそ、冒険なのだと彼は語ります。彼は GPS を今回、極夜行に持って行きませんでした。「行動によって思想を表現する。六分儀を使って星を天測し、自分の位置

を確認することが脱システム的行動なのだ。」と語ります。人跡未踏の地は残っていなくとも、未知の世界を探検することはできることをこの極夜行で証明しました。しかしその六分儀も早い段階で暴風雨に遭い、風に飛ばされる。

また、「氷床で何度も北極星を見て、自分の感覚を捨てなければ正しい道は開かれる。という絶対他力的な感覚を覚えたとき信仰の原初的形態を理解できた気がした」など異常な状況の中で探検家の思索も深まっていきます。

「人間にとって光とは出生経験の再来であり、不安と恐怖からの解放でありだからこそ希望の象徴にもなっているのだ。光に無言の憧憬をおぼえるのも、世界中の神話で闇と光が死と再生のモチーフとして語られてきたのも、太陽が再生の神なのも、すべて出生時の壮大な光景とインパクトの記憶が、人間の精神と肉体には刻み込まれているからに違いない」極夜の闇をくぐりぬけて、最後に太陽をみるという行為と出生行為の追体験願望は繋がっているという洞察には感服しました。

学生時代から 10 年以上にわたり固執してきたツアンポー渓谷。2002 年～2003 年の冬に初めて単独探検。2009 年～2010 年の冬に再度のツアンポー渓谷の探検の様子は「空白の五マイル」に詳しく書かれています。この作品はそれ以来の彼の 35 歳から 41 歳までの勝負をかけた旅（探検）を余すところなく記録しています。

（深澤　裕）

「極夜行」 2018 年 2 月 10 日　文芸春秋 1890 円

「新･冒険論」2018 年 4 月 11 日 集英社インターナショナル新書 799 円